キャラクター名

シュッツェ

プレイヤー名

ポジション	コート	**享年**	16
メインクラス	レクイエム	**暗示**	罪人
サブクラス	レクイエム	**寵愛点**	30

初期配置	花園
最大行動値	12

能力値	**クラス**	**修正**	**合計**
武装	4	0	4
変異	0	3	3
改造	0	0	0

記憶のカケラ	内容
呪い	言せないヤツがいた。あなたは、その恨しみを込めて復讐をした。毎日祝って、ずっと祝って、日を覚ましたらあなた自身が呪われていたのだ。アイツも絶対呪われているはず、呪われたアイツを同じ目に合せてやる。
鳥籠の鳥	閉じ込められている小鳥がかわいそうで。あなたは、籠の中の鳥を逃がした。今のあなたは、死なない体に閉じ込められた小鳥。いつか誰かが哀れみ、逃がしてくれるだろうか。
殺戮	それはとても簡単だった。引き金を引いて、大きい音を聞くだけでいい。それだけでみんな簡単に転がって何も言わなくなった。ああ、胸がすうっとする。殺して殺して殺して、何もかも殺しつくしてやる。
血の宴	目の前広間は、将棋盤のようにみ内臓飛び散っただけで、置かの内臓が所狭しと並んでいて、将棋は違う青いや、赤い臓にだけっていてまって臓が変わらないそれだけっている。その中央に最大の盛りの女を置て、君が手に持った鋭利な刃物で、絶望を抱いた事であった。これは何だ、まるで――、
少女	ってはまだいない。これから始まるのであった。それは、八百万ゼロの煉獄にたった1人で存在するようなものだ。ゼロは、ただ一つの事であり、それ以外は全て無であった。ゼロは、孤独な少女であった。彼女は何かを求めて、ただただ歩き続けた。ある日、彼女は、彼女の前に1人の男がたたずんでいた。その男は、ゼロに話しかけた。ゼロは、その男と話すことで、自分の存在を知ることができた。その男は、ゼロに名前を与えた。ゼロは、その名前を気に入った。ゼロは、その男と一緒に旅をすることにした。ゼロは、その男と一緒に旅をすることで、自分の存在を知ることができた